

第540回 テレビ岩手 放送番組審議会

1. 日 時 2018年4月17日(火) 午後1時30分～

2. 開催場所 テレビ岩手 6階大会議室

3. 委員総数 9名

出席委員 7名

委員 長	五日市 知香
副委員 長	三浦 茂樹
委員	恒川 かおり
委員	大橋 綾子
委員	佐藤 俊彰
委員	大内 敦
委員	加藤 千晶

欠席委員 2名

委員	佐藤 健志
委員	高橋 司(新任)

社側出席者

檜崎 憲二	(代表取締役会長)
榎野 信治	(代表取締役社長)
山口 英二	(専務取締役)
青山 尚之	(常務取締役 兼 編成局長)
池田 学	(営業局長)
柴柳 二郎	(報道制作局長)
小形 恵一	(報道制作局報道部長)
三浦 裕紀	(報道制作局報道部)

事務局 遠藤 隆 (編成局放送番組審議会事務局長)

平山 亜希子 (編成局編成業務部副部長)

4. 議 題

- 3/17(土) 10:00～10:30 ニュースプラス1 特集「ふたごじてんしゃ」
- その他

5. 資 料 (資料として以下のものを配布)

- ・ 視聴者からのご意見
- ・ 2017年度10月～3月第3週 種別放送時間合計

6. 意見

委員側意見

○被災直後からお店を再建するまでの7年間という事だったが、赤字経営で新店舗を再開するのに仮設店舗で一人不安を語る苦悩する顔と、子どもの成長を見守る優しい笑顔との対比がこの方の7年間の心の奥にある様々な気持ちを映像に映し出していると思った。

○ドキュメンタリーは特に震災に関係した場合は、時に見ている側にすると重く感じたりする事もあるが、子ども達の屈託のない笑顔や成長が番組の随所に織り込まれ、生放送も入れて新しいテンポも披露し、見終わった時の気持ちが和み、未来に向かう爽やかな終わり方で良かった。

○個人事業主で被災されて店舗再開に向けて頑張っている同じような境遇の方はたくさんいらっしゃるが、今回の方は被災直後から取材されてきていたので、何か特別な理由があれば教えていただきたい。

○被災地の復興の進捗状況を自転車屋さんの家族を通して映し出すという非常に上手な番組の作り方。30分見終わったときに非常に心の温まる番組だった。

○大槌の復興の状況を定点カメラが非常に分かりやすく、町がどう変わっていったのか、時間が比較的にかかっていることも含め、非常によく分かった。

○子ども達が大変かわいくて、お店が大槌の中心部の目立つ場所にありどういうお店なのか気になっていたが、こんな重い物語があったというのは正直意外だった。見終わった後に心の中に、温かいものが残って非常に良い印象だった。もちろんドキュメンタリーとしても優れているが、良くできたドラマ、あるいは短編映画を見ているような印象だった。

○番組の構成も最後の中継の部分が活かされていて良かった。、それまでのこの家庭の変遷をしっかりと紹介した上での中継で、自然に、しかも中継の状況も素直に受け入れる事ができた。

○サイレンに合わせて黙祷するシーンも余計なナレーションがなくて、歌だけ入っていた事がかえってこの歌のセリフを印象深く際立たせたのではないかと思う。

○震災とか津波の被災者に画一的なコメントはなかなか難しく、あえて言わないというのは大事な事だと改めて感じた。

局側意見

○取材したきっかけは、震災の年に結婚式を挙げられないカップルが釜石で合同で結婚式を挙げるという事がありまして、その時にニュースのほうで5回のシリーズで企画を放送した際偶然担当になり、ご夫妻の空気感というか雰囲気にも惹かれたことと、制作者

視点からすると、再建した時に形になると思えば7年間かかったが、定期的取材をして今回形にすることができた。

○最後中継は結果的に3月の最初に急にオープンが伸びたということになって、急遽中継を変えたが、やるからには驚きとか面白味があったほうがいいと思えば、セオリー通りではなくVTRのあと最後中継で驚かせる感じのほうが面白いのかなという制作者の楽しみの部分で中継にチャレンジした。

○サブタイトルをつけなかった意図は、例えば「大槌、被災自転車7年」などつけると、伝えすぎて見る前にイメージが作られてしまうという思いがあり見る前のワクワク感を持ってもらいたく、固定観念を持たずフラットに番組をみてほしいと考えた。

7. 審議機関の答申または意見の概要を公表した場合におけるその公表の内容、方法及び年月日

公表の方法

- ①自社放送 4月24日(火) 11:45-11:52 「あなたと歩むテレビ岩手」
- ②テレビ岩手本社での備え置き
- ③読売新聞への掲載
- ④自社HPでの掲載 <http://www.tvi.jp/banshin/index.html>